

187

164

祭典作法

全

014066-000-2

187-164

祭典作法

中垣 孝雄/著

M34

ABB-0322



神



習



從一位勳一等酒部卿建通

八十六翁書



忠起

出子存

如名

紀

大本神系

海子心道

乃

しをるる

ル

序

神社ハ 畏クモ上皇祖皇宗ヲ奉齋シ下忠勇義烈國家若シクハ地方ニ功勞アルノ
士ヲ祭祀スルノ聖境タリ
故ニ其祭祀ノ典儀ハ違フコトナク紊ル、コトナク極メテ嚴整ニ極メテ嚴肅ニ之
レヲ執行セサルヘカラス
然ルニ近來物質的文明ノ進歩ト共ニ其祭祀典禮漸ク其本ヲ失ヒ諸神社行フ所ノ
作法紛亂シテ揆一スルコトナク神明ニ奉仕スル者其適歸スル所ナキニ苦ムノ觀
ナシトセス 苟モ此ノ如キハ獨神祇崇敬ノ途ニ於テ欠クル所アル而已ナラス彼
ノ忠勇ヲ重シ義烈ヲ慕フ國民的道德ノ退歩ヲ反彰スルモノナリトイフモ亦過
言ニアラスト信ス 知己中垣君夙ニ國學ヲ修メ神祇ノ事ニ詳ハシ頃日一書ヲ著
ハシ神社ノ典儀ヲ詳述ス俱サニ是レ目下須要ノ書ト云フヘシ爾今祭祀ノ事ニ當
ル者此書ヲ通觀セハ各社ノ行事作法整然トシテ自ラ則有ルニ至ルヘシ以テ報本
反始ノ誠ヲ致シ以テ特有ノ國華ヲ發揮スルコトヲ得ン乎聊カ記シテ以テ全君ノ
勞ヲ多トス

明治三十三年十一月二十九日

中川友次郎

自序

婢僕だに人に事へて禮を缺けば人忽ち怒る 然らざれば使はず 其の使ふ者は人にして其の事ふる者は奴婢なり 人にして然り況んや神に於てをや 奴婢にして然り況んや神職に於てをや

神職とは何ぞ 神社に直接奉仕して國家の典儀を代表する職務なり 神社とは何ぞ 所謂國家の宗祀にして國民道德の本源なり 其の禮典此の道德は祭祀の上灼然たり 祭祀とは何ぞ 國家彝倫の標準なり 故に嚴ならざるべからず 神職々務の主腦なり 故に齋肅恭敬ならざるべからず 又本邦古風の儀式なり 故に定式あり作法あり又心得なかるべからず 其の心得其の作法其の定式を識らずして妄りに意の向ふ所を以てし禮を缺き神明を汚瀆する者少なからずと聞く 是神職として責任の免るべからざる欠點なり

奈良縣々社以下神職諸氏は夙く此處に曉を開き從來所見の作法書存るにも拘はらず其の作法を一致せむとして既に起稿しつゝある折柄東京皇典講究所にて神職講習會を開かれたり則ち予をして此處に講習せしめ次で此の編を起さしむ 予

彼の講習會に練習したるを基として編首に祭式の例二三を加へ心得の部に入るべきものを抜いて編末に載せ合せて一卷と成し祭典作法と名付けたり然れども節約度に過ぎたると文拙く語鄙しきとに因りて意表はれず覺り難きも多かるべし尙且つ社司掌需用の目的なれば一般に通ぜざる点もあるべし況んや各社古例の儀式あるをや只冀くは幸に諒察あらむことぞ

明治三十三年十二月

著者 識す

凡例

- 一 祭式作法及心得と部を別ち各項目を設けたるは讀者の見易からむを爲なり
- 一 祭式の例二三を載せて他を省きたるも餘は推して知るべければなり
- 一 揖拜等の圖を掲げざるは諸書に散見したればなり
- 一 揖及拜又拍手等は必要の廉を示して他は之れを畧し昇降階及警蹕蹲踞坐等も須要の所のみ擧げて他は省きつ
- 一 凡そ物の持方渡し方及献り方等は一を記して含ませつ
- 一 標注は主として讀者の参考に供したり故に其の性質一ならず
- 一 神職の服制は勅令第三百七十九號明治三十三年十月六日連にて改正せられたること官報其の他に載せられたれば此も略きつ 猶此の他心得べきこと數多なれば紙數に限りあれば後日に譲りて増補せむ又諒察せよ

祭典作法目錄

祭式ノ部

祓殿次第

祭場次第

大祓次第

遷官次第

附直會式

作法ノ部

把笏

正笏

笏ノ置キ方

笏ノ執リ方

起居及進退

居坐法三則

起立法三則

進行法三則并退歩

歩行ノ折及回轉

左折法

右折法

左右回轉法

坐ノ折及回轉

揖ノ事

坐揖ノ法

立揖ノ法

拜ノ事

坐拜ノ法

起拜ノ法

立拜ノ法

再拜ノ法

拍手法

膝行及膝退

伏行

啓折

奉幣作法

祝詞奏上法

心得ノ部

祓主ノ心得

大麻行事心得

上棟祭ノ祓ト普通祓ト異ナル心得

祓除ヲ受クル心得

塩湯行事心得

散米行事心得

開閉扉式心得

殿階ヲ昇降スル心得

警蹕ノ心得

開閉扉式ノ時敬禮ノ心得

献供式順序

神僕ノ並列順序

躡蹕

跪坐

玉串及幣鍵等ノ持方

同渡シ方

玉串ノ奉リ方

薦職及圓座ノ鋪設心得

高坏三方等ノ持方

案ノ持運ヒ方

切麻ノ散シ方

神籬ノ辨

飾装用神ニ鏡劔及曲玉ヲ懸クル心得

押折ノ心得

着香及脱香ノ心得

祭典作法

祭式ノ部

前日神職氏子(或ハ信徒)總代等祭事ニ與ル者ハ總ヘテ齋戒沐浴シ豫メ神殿拜殿等ヲ裝飾シ或ハ前夜祭各神社傳來ノ古式ニ隨フヲ行フヘシ
當日早旦更ニ神殿其ノ他ヲ裝飾シ神饌幣帛等ヲ調整スヘシ

祓殿次第

定刻祭官及參向ノ地方官員等順次祓殿ノ前ニ着坐ス 但シ祓殿無キ神社ニテハ

神籬ヲ設ケテ降神ノ事ヲ行フ又降神行事ニ菅搔ヲ用フル古例アリ

次 神饌ヲ供ス 或ハ缺ク

次 祓詞ヲ奏ス

次 大麻行事

次 盥湯行事

次 撒饌

前ニ降神ノ事奉仕セシ場合ニハ此ノ時昇神ノ事ヲ行フ

次 各退出

祭場次第

齋主以下祭官順次着坐ス

次 参向ノ地方官員順次着坐ス

次 隨行員幣物ヲ門内ニ入レテ假ニ砌上ニ置ク

次 齋主昇殿シテ開扉ス 警蹕并一同拜伏

此ノ間奏樂以下

奏樂以下

次 神饌ヲ傳供ス

次 隨行員幣物ヲ假ニ案上ニ置ク

次 齋主奉幣行事

次 齋主祝詞ヲ奏ス

次 参向ノ地方官吏玉串ヲ献テ拜禮

次 隨行員拜禮

次 齋主玉串ヲ献テ拜禮

次 祭官順次或ハ拜禮

次 氏子(或ハ信徒)總代等順次或ハ拜禮

特ニ古例ノ神事アル神社ハ此ノ時神樂舞樂等其ノ他ノ諸事ヲ行フ

次 撤饌

次 閉扉開扉ニ

次 一同順次退出

但シ直會式アラハ此ノ次ニ行フ

大坂次第

當日神殿ヲ裝飾シ祓所ノ鋪設及祓ノ具ヲ整製ス

其ノ儀庭上或ハ拜殿ノ左右ニ椅子或ハ圓座ヲ設ケ中央ニ高机ヲ置キ祓物ヲ載セ其

ノ前ニ祓主ノ坐ヲ設ク

定刻齋主以下神職氏子總代地方官員等順次着坐ス

次 本殿開扉

奏樂

次 神饌ヲ供ス

奏樂

次 齋主祝詞ヲ奏ス

次 祓物ヲ置ク

次 切麻ヲ頒ツ

次 祓主中央ノ坐ニ進ミテ祓詞ヲ讀ム

次 大麻行事

次 神職及地方官吏并ニ氏子總代等各切麻或ハ申ヲ取テ祓フ

次 撤饌

次 閉扉

次 齋主以下順次退下

凡大祓ニハ前日人形又云形代ヲ造リテ氏子ニ頒布シ置キ氏名年齢等ヲ認メサセ乃

ト當日之ヲ持參セシメテ罪穢ヲ祓フヘシ又六月禊祓ノ式ニハ豫テ茅ノ輪ヲ作

リ置キ參拜ノ人ヲシテ之レヲ潜リ拔ケシムルモアリ

遷宮次第但正遷宮假遷宮准之

豫テ大祓ヲ行ヒ殊更ニ身ヲ淨メ新殿ノ四方ニ注連ヲ引キテ由布ヲ垂レ竹及柳ヲ

一同平伏或ハ立禮

建テ覆面手袋等ヲ調製スヘシ

渡御ハナルヘク夜ヲ以テ路上ニ幔或ハ行障ヲ用フヲ張リ幔ノ上ニ雲形ノ布

ヲ引キ廻ラヌ古例アリ而シテ庭道ヲ作り布ヲ其ノ上ニ鋪ク但シ布ハ出御ニ

ミ用フルモノト心得ヘシ道遠カレハ畧スルモヨシ若シ庭サヘ無キ場合ニハ清淨

ナル土砂ヲ敷クヘシ盥水ヲ沃キ庭燎ヲ燃ク準備整ヘ祓畢レハ

先ツ祭官假殿ニ進ミテ着坐ス

次 遷幸ノ祝詞ヲ奏ス

次 内扉ヲ開ク此ノ時火ヲ滅シ割笏ヲ鳴ラシテ節ヲナス

次 出御 或ハ御船代ヲ抱ヘ御笠ヲ躡フ又御羽車ヲ用フヘシ但シ御笠及羽車ヲ

略ストモ指几張ハ缺クヘカラス

次 松明 （遙カニ前後ヲ照ス）

次 警蹕 啓行ノ者幸木ヲ取りテ之ヲ呼フ

次 渡御

次 神馬ヲ牽ク或ハ牽カス

- 次 鎮坐
- 次 内扉ヲ閉ツ
- 次 神寶ヲ納ム但内外扉アル神社ニシテ内扉ノ外ニ納ムル場合也
- 次 奏樂或ハ神幸路次ニ立樂ヲ作シ出御入御ニ亂聲ヲ奏スルコトアリ
- 次 供饌
- 次 奉幣
- 次 鎮座ノ祝詞ヲ奏ス
- 次 倭舞社例ニ
- 次 奏樂同上
- 次 撤饌
- 次 閉扉
- 次 直會
- 次 退出

此ノ他諸祭ノ次第ニ（或ハ祈年祭ノ供饌ニ稻種ヲ献シ新嘗祭ニ氏子或ハ信徒

直會人盃ヲ笏ニ居エテ傳フル例
應永廿九年十月廿九日（中略）上卿居盃於笏傳參議參議又居笏傳辨中略）盃盤之時者居盃於笏可傳也机之時者不可傳笏
（康富記）


ヨリ出ス初穂ノ懸稅ヲ供スル等）聊カ異ナリタル所ナキニアラテト大同小異敢テ舉クルノ必要ヲ認メス故ニ之レヲ省略セリ

附直會式

參向ノ地方官吏即チ其ノ日ノ重員ハ直會殿ノ左祭官ハ右ニ列坐ス 而シテ甲乙ノ直會役アリテ 甲勸盃ハ三方或ハノ上ニ盃及撤饌物ヲ載セ 乙執瓶ハ瓶子或ハナ持チ兩人地方官吏ノ坐前ニ進ム（膝行膝退坐揖等神前ノ舉動ノ如シ）此ノ時上座ノ人笏ヲ懷中シ一拍手シテ盃ヲ享ケテ神酒ヲ戴キ畢リテ盃ヲ三方ニ載ス笏ニテ傳フル例モアリ之レヲ一献ト云フ 斯ク順次全ク終リテ又一献或ハ二献以上三終了シテ一同一揖退出ス 直會役三方及瓶子等ヲ下ク是レ普通直會式ノアラマシナリ

注意 執瓶子役ハ最初ノ一献ニノミ三度ツ、酌クカ體ナリ

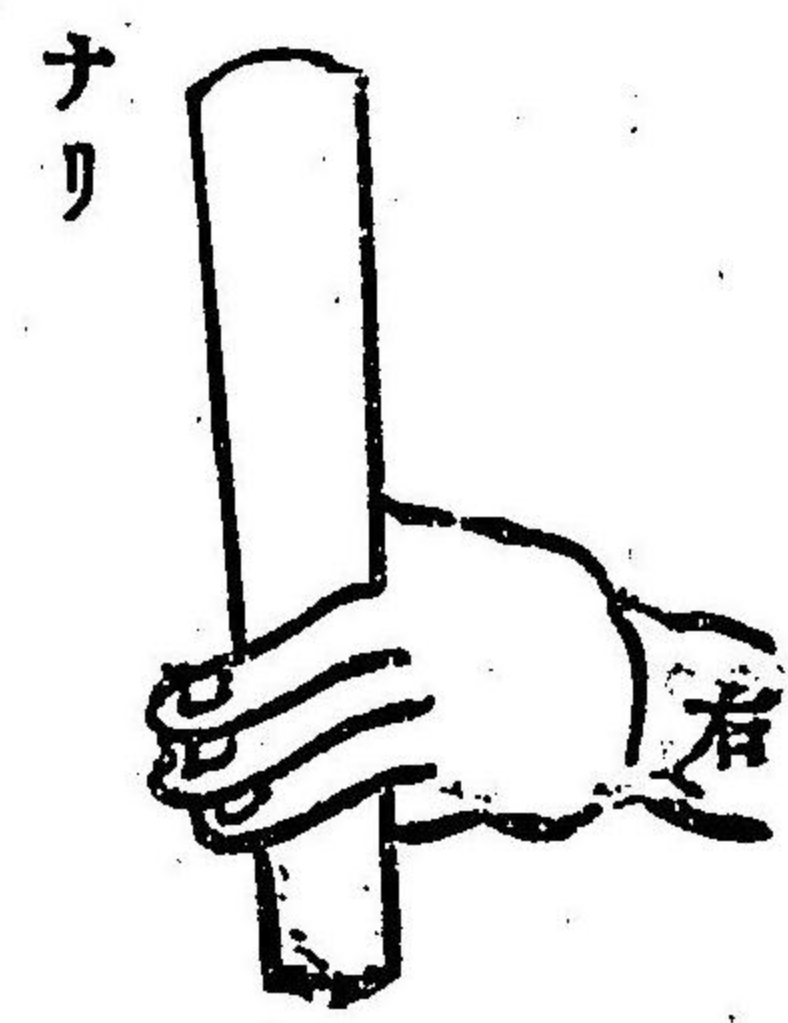
參向 伊勢神宮ニ行ハル、直會式ニハ直會役三人一人ハ勸盃ナリヲ用フ 又盃ハ末廣ニテ拂ヒ勸ム即チ禰宜ノ役ナリ 一献了リテ次ニ新シキ盃ト取替ヘテ勸ム 三献ニ至リテ禰宜ハ直會人ニ對シテ「御箸を」ト聞ユレハ一同箸ヲ執

リテ盃ニ鬻ラス  圖ノ如シト云フ直會人ノ坐次其他異ナル處ナシ

作法ノ部

筭ノ扱方

一把筭又云持筭法



把筭ハ上圖ノ如ク右手ニ持テ右側ノ腰ニ寄セ當ツルナリ。左手モ同シク腰ノ左側ニ掌ヲ開キ拇指ヲ隠シテ當ツ是ノ尋常ノ所作即チ起居進退等無爲ノトキノ構ヘ

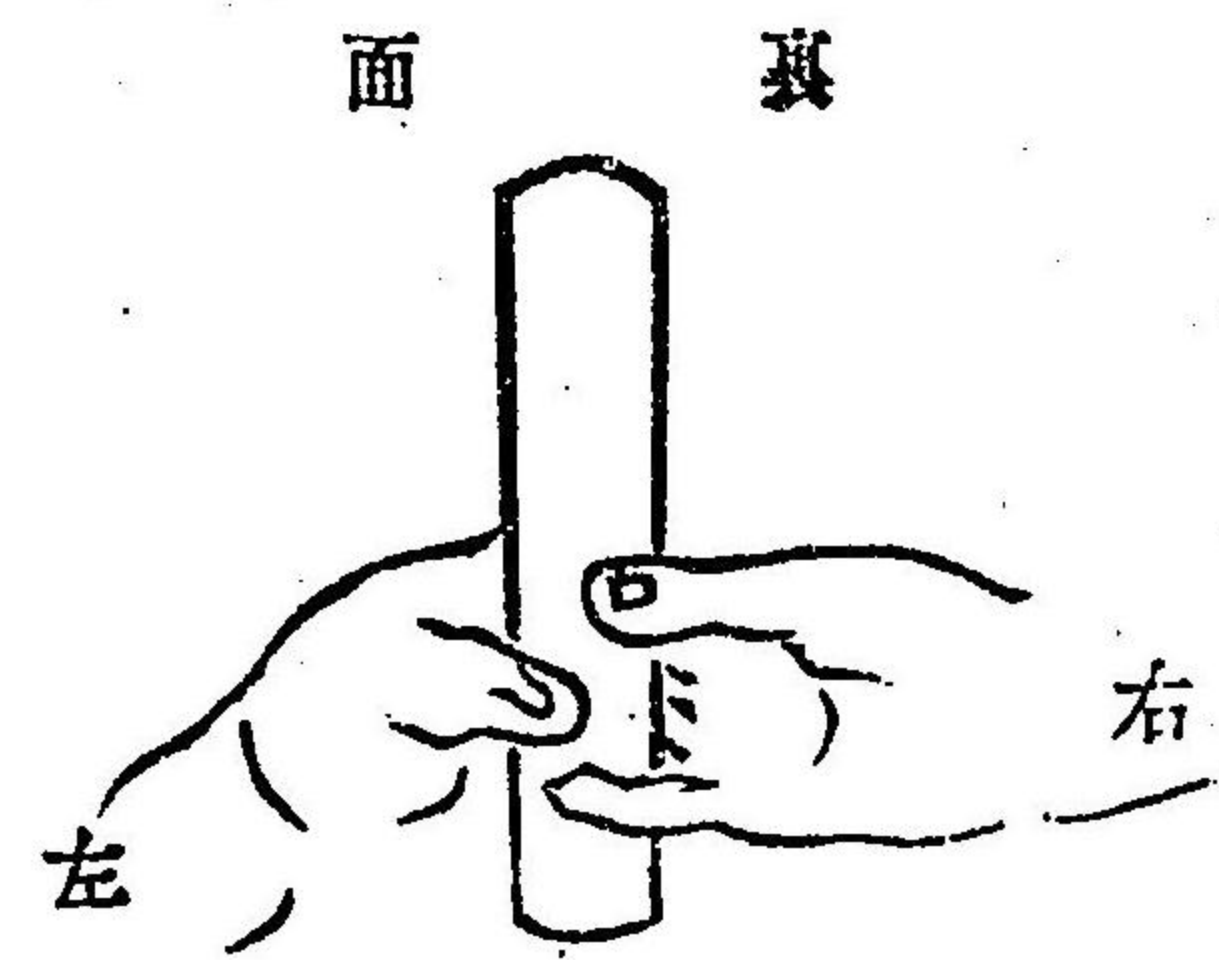
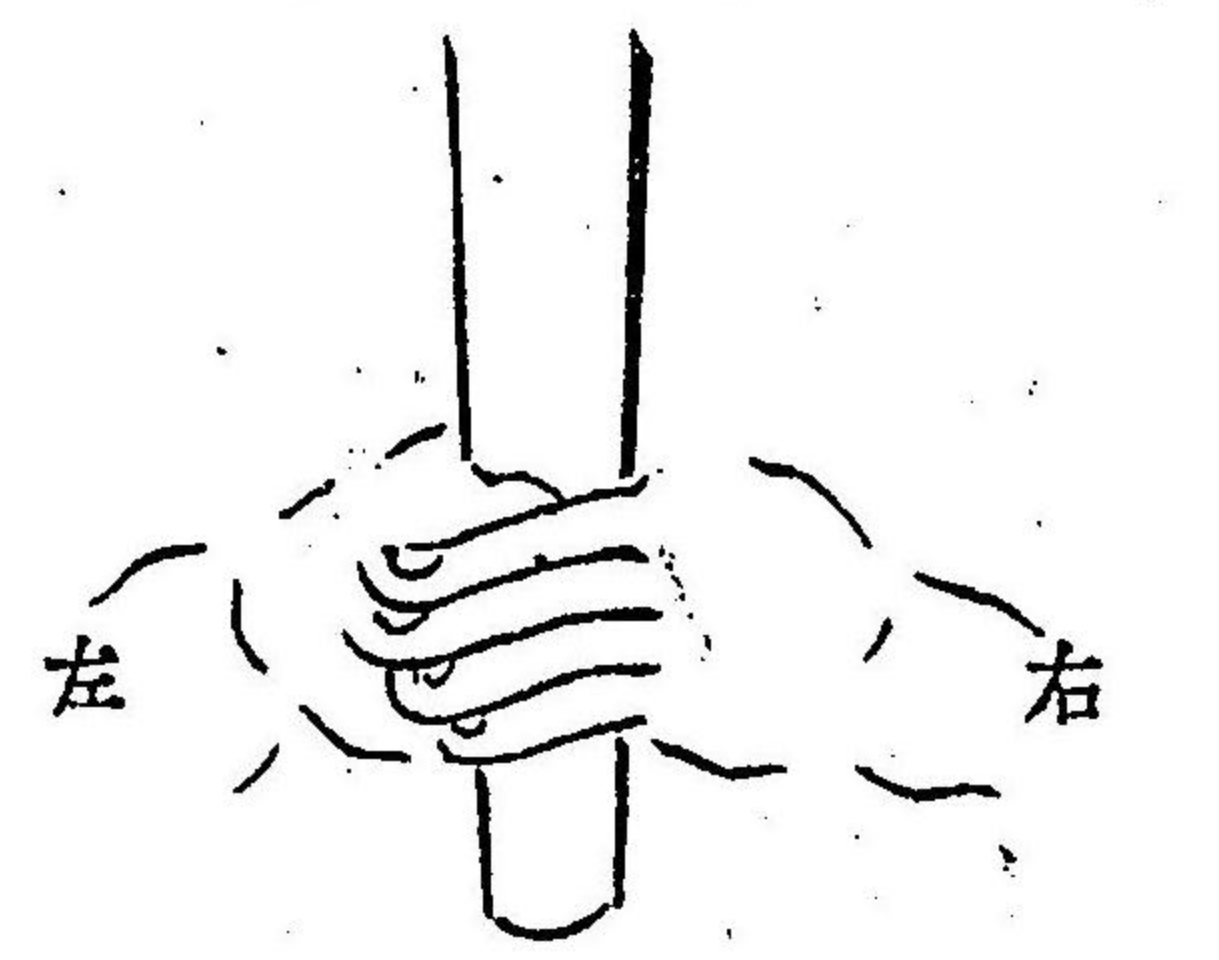
備考 不露手ヲ以テ袍ノ袖ヲ隠シテ手持之。トハ作法故實ニ云フ所ナリ然レド實行シ難ク又古風トモ想ハレヌ態度ヲ失スル患サヘナキニアラズ尙且現今宮内ニ此ノ作法ナシ故ニ採ラス

一正筭

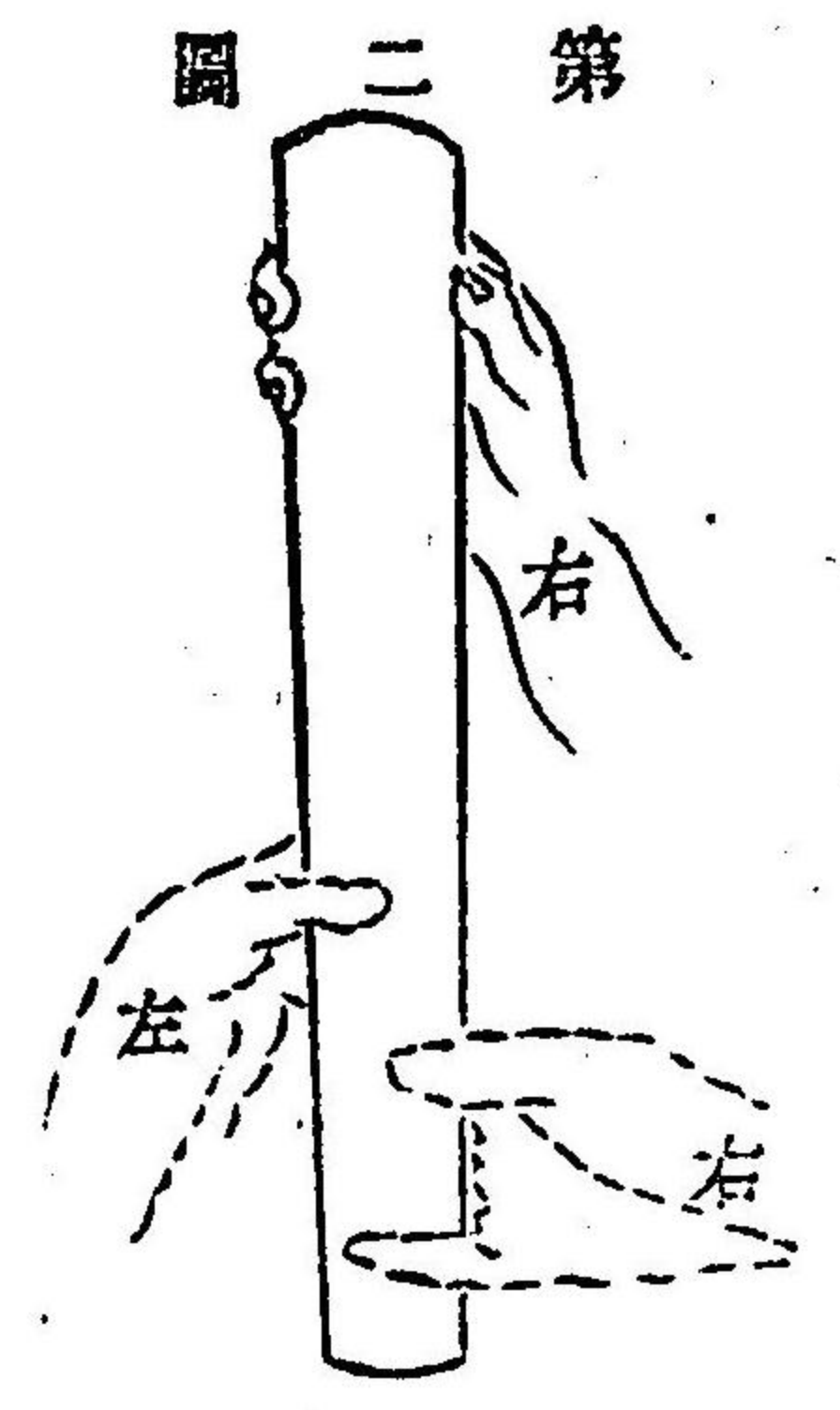
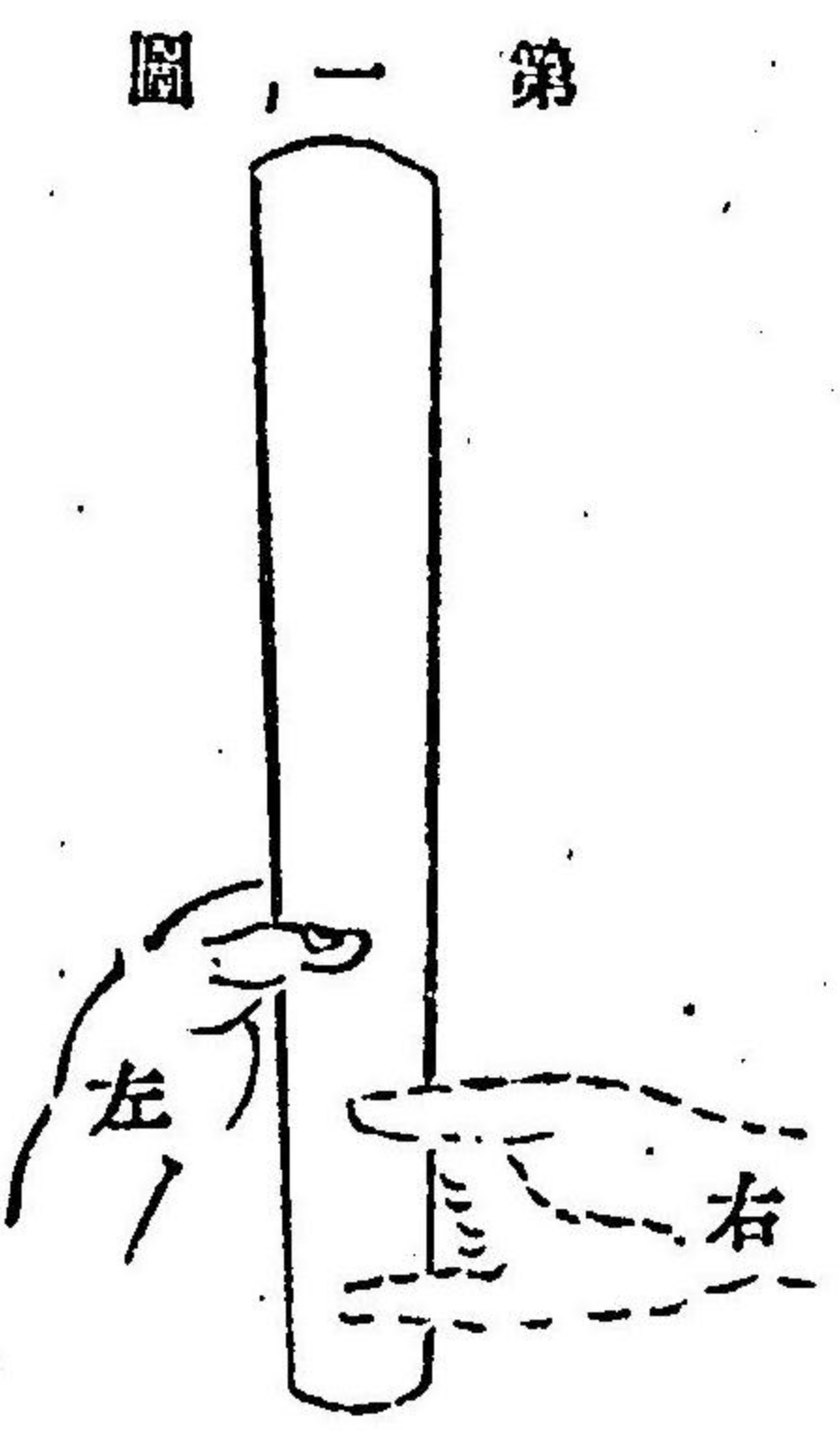
正筭ハ揖及拜スル時其ノ躰度ヲ矯正スルノ構ヘニシテ下圖ノ如ク両手ニ持テ

片手持之時
胸ノ下腰上腹
中ニ持之寄
右方ニ持之
(作法故實)

脛ヨリ凡ソ七寸許前ニ指シ出ス (此ノ時筭頭ハ額ヨリ一寸許下ニ在ルナリ) 而シ表テ何レモ筭ハ直立ナリト心得ベシ 筭ノ丈ハ人ニヨリテ同シカラス大抵坐シテ腰際ヨリ肩ニ至ルノ寸法トス



一筭ノ置キ方
筭ノ置キ方
ハ把筭シタル右ノ手ナ身ノ左側ニ寄セ次ニ右



手ノ上チ左手ニテ持ツ第一圖ノ如シ次ニ右ノ手ニテ筭頭一寸許下チ持ツ第二圖ノ如シ次ニ左手チ放シテ其ノマ、筭ノ根本ニテ膝上チ擡リツ、筭ノ裏チ神

指笏事
謂レ挿ヌキ笏ヲ於
腰ニ也其時有ニ
故實(中略)
以ニ右ノ手ニ逆
手取リ笏ヲ而
左ノ袖下ニ後
指通テ即以テ
左ノ手ニ逆取テ
手本ヲ逆取テ
順ニ右ノ手ヲ
以テ左ノ袖ノ
端ヲヒカヘテ
左ノ手ニ持ッ
笏ノ手本ヲ帶
ノ上ニ當テ後
ヘマハス(作
法故實)

ニ見セサル様右側ノ膝脇ナル袴ノ下ニ指シ入ル、ナリ

一 笏ノ執り方

笏ノ執り方ハ前置キ方ノ作法ヲ反覆スル所作ト知ルヘシ其ノ略圖下ノ如シ

注意 座ノ時ノ笏ハ右座ニ置キ起立

ノトキノ笏ハ懷中スルナリ 帖紙ヲ(或要ス)

ハ腰ニ指スモアリ) 又笏頭ヲ持ツニ

拇指ト無名指ト小指トノ三本ニテ持ツハ故實ナリ其ノ意シテ持ツヘシ

起居及進退

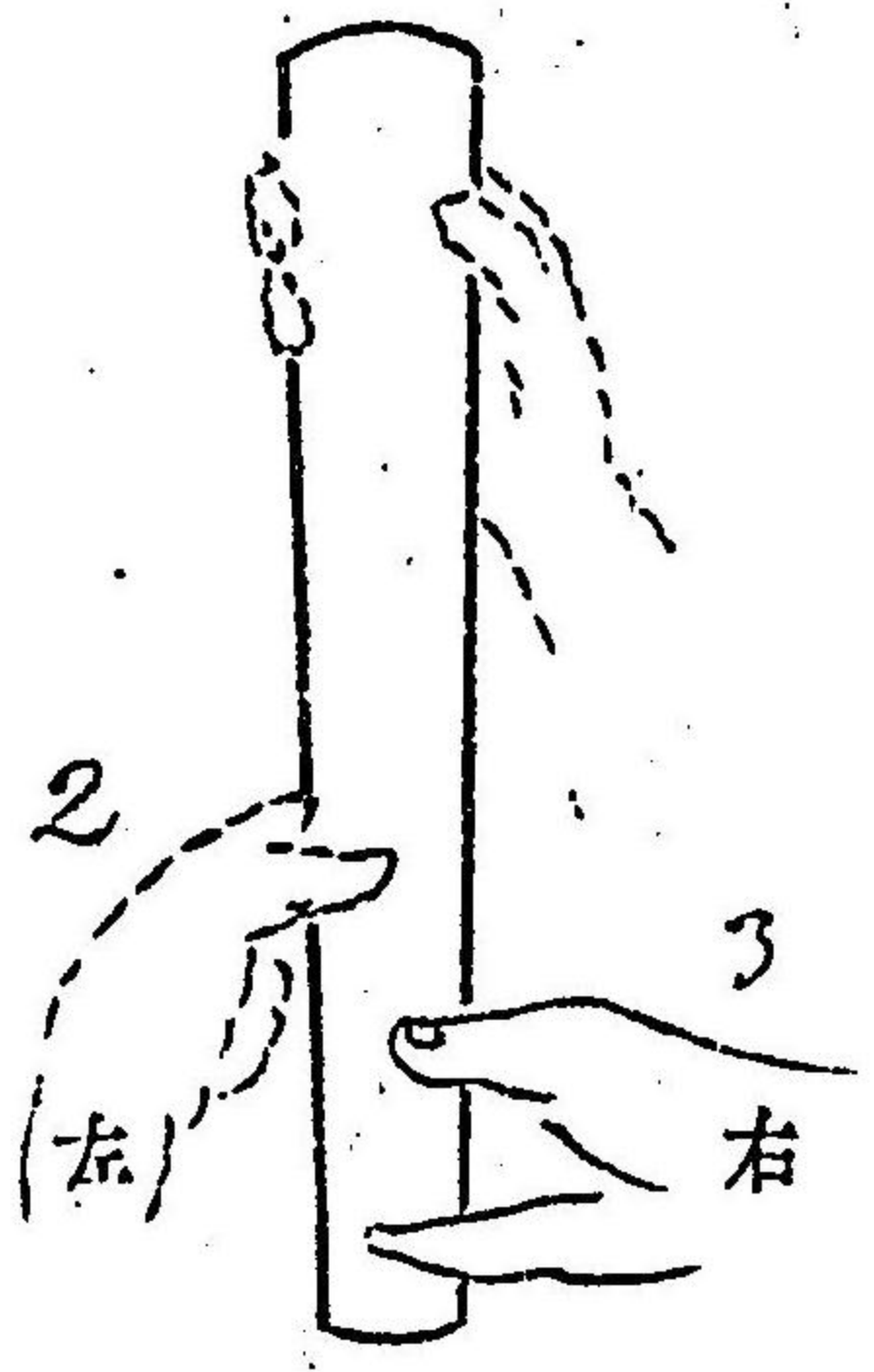
一 居座法 三則

(イ) 神前ニ進行シテ坐スルトキハ左足ヲ半歩後ロニ退ケテ膝ヲ突キ次ニ右足ヲ

退ケテ左足ニ接シ次ニ爪立テタル足ヲ伸シテ坐ス

(ロ) 退キテ坐スルトキモ先ツ左足ヲ屈シ次ニ右足ヲ屈シテ坐スルナリ

(ハ) 居坐ノトキハ足ノ指ハ左ノ拇指ヲ上ニ重テ膝ハ約三十度ノ角ヲ作スナリ



一起立法 三則

(イ) 神前へ進行ノ時起立ノ順序ハ着坐ノマ、両足ヲ爪立テ、身体ヲ支ヘ右足ヲ

少シ前ニ出シテ膝ヲ起ツ次ニ左足ヲ起ツルト共ニ身ヲ起シ左足ヲ進メテ右

足ニ踵接スルナリ

(ロ) 退下ノ時ハ右足ヲ退ケテ左足ニ接シ次ニ左足次ニ右足ト三步退キテ後歩行

スルナリ之レヲ逆行ト云フ

(ハ) 起立シタル時ハ  上圖ノ如ク兩足約三十度ノ角ヲ作ス而シテ容姿ハ

ナルヘク整立シテ態度ノ中庸ヲ失スヘカラス

一 進行法 三則

一 神前正面ナル場合ニハ左足ヲ先キニ進メ運フナ常式トス 式場右ナル場合

亦然リ 假シ式場左ニ在ル場合ニハ左足ヨリ踏ミ出スヘカラス必ス右足ヨ

リ始ムルナリ是レ神前近キ方ヲ動カスノ不敬ヲ避クル所以ナリ以下之レニ

準ス

二 歩行ノトキハ足ノ指ヲ少シ上ケ踵ニテ地ヲ擡リツ、運フナリ大股ニ歩ムヘ

通行者乍立退
之白也

深歩之時或ハ
片手ニ持リ笏ヲ
或ハ兩手ニ取リ
之レヲ作法故
實(現今式部
職ニテハ片手

カラス又真中ヲ歩行スヘカラス此ノ時笏ハ片手ニ持ツテ通例トス
三神前へ進行シタル時ハ最モ靜肅ニ恭シク一揖シ其ノ位置ヲ更メスシテ左足
ノ膝頭ヲ圓坐ニ付シ次ニ右足モ同シク付シ並ヘテ次ニ左右左ト少サク膝行
シ軾ノ中央ニ到リテ坐シ而シテ坐揖スルナリ

注意 起居ニハ必ズ揖アリ物ヲ渡シタル時モ亦然リ膝行膝退ハ神前ハ勿
論凡ヘテ貴人ニ接スル時及物ヲ授受スル時ノ禮ナリ其ノ作法下ニ云フヘ
シ

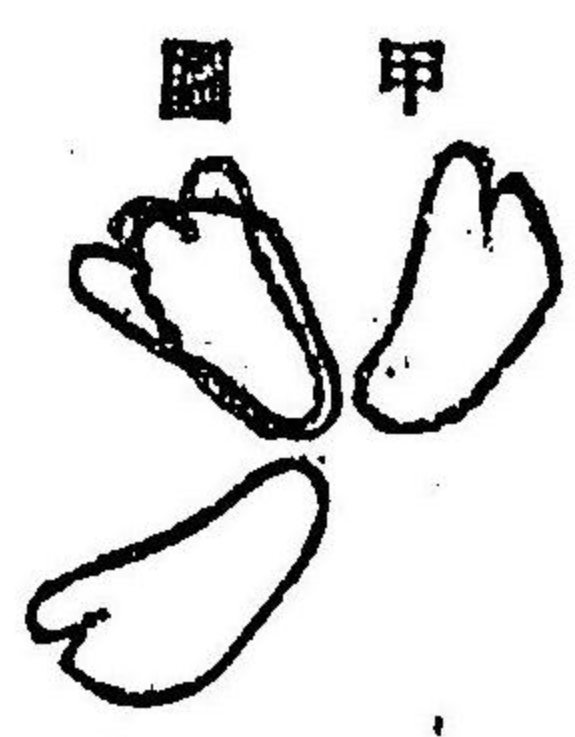
一退歩法

退歩ハ前居坐法及起立法ノ第二項(ロト)進行法第二ノ所作ヲ應用スヘシ

行歩ノ折及回轉

一歩行シテ左折スル法

歩行シテ左折セントスル時ハ左足ヲ左ニ折リ右足之ノ
ニ從フテ捻テ曲リ足ハ約三十度ノ角ヲ作スナリ甲圖ノ
如シ



一右折ハ前左折ヲ反覆スルノ所作ナリ乙圖ヲ見テ
其ノ實ヲ行フヘシ

一歩行シテ左ニ回轉スル法

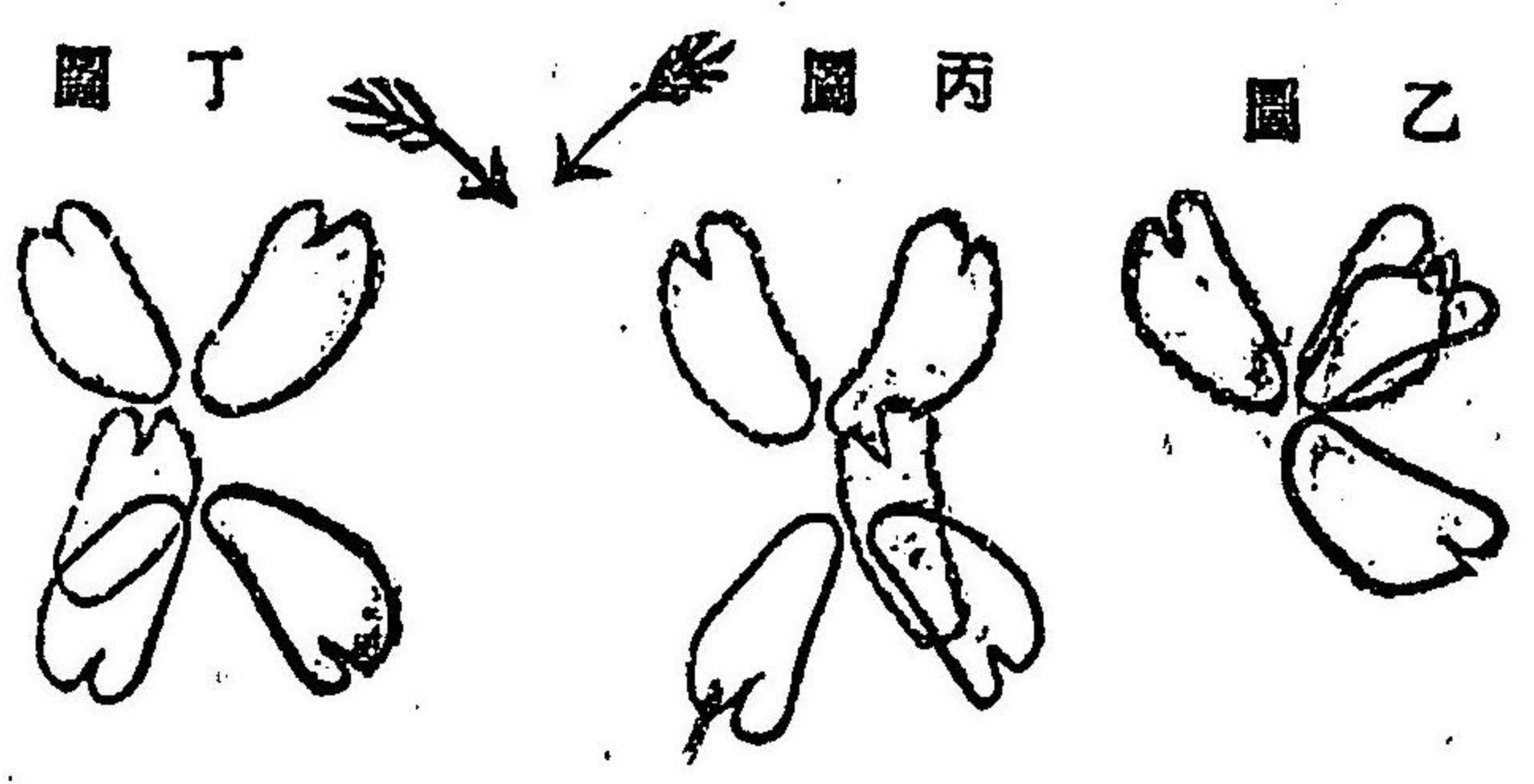
歩行シテ左ニ回轉セントスルトキハ左足ヲ右足
ノ踵ノ後ニ引キ次ニ右足ヲ左足ノ小指ノ横ニ
引キ次ニ左足ヲ上ケテ兩踵相接スルナリ丙圖ヲ
見テ其ノ順ヲ覺ルヘシ

一右ニ回轉スルハ前回轉ノ反覆ナリ丁圖ヲ見テ知
ルヘシ

坐ノ折及回轉

坐ノ折及回轉モ同シク左右ノ二法アリテ前作法ニ異ナル處ナシ然レモ彼ハ足先
ノ舉動ニシテ此ハ膝頭ノ舉動ナリ而シテ坐ノ折及回轉ハ兩足ヲ爪立テ、居廻ル
エトヲ忘ルヘカラス

注意 折及回轉又ハ足ノ運ヒ方等凡ヘテ神前ニ近キ方ヨリ始ムヘカラス必



ス遠サカリタル足ヨリ動カスヘシ

揖ノ事

一坐揖ノ法

坐揖ハ正笏シテ腰ヲ折ルハカリナリ頭ヲ下ケ首ヲ見ハスハ無禮ナリ又拜ト混同スヘカラス拜ハ即チ平伏ノ姿ニシテ揖ハ即チ四十度許ノ角ヲ作スナリ又揖ハ恭チ示ス所以ニシテ拜ハ敬チ賜ハス所以ナリ故ニ揖ハ腰ヲ淺ク折ルハカリナルモ拜ニアリテハ腰ヲ深ク屈ケ脊ヲ水平ニ作スナリ

一立揖ノ法 又云沓揖

坐チ起チ正笏シテ面頭ヲ垂レノ膝ヲ縮メスシテ腰ヲ折ルハカリナリ足ヲ曲ムルハ非ナリ

拜ノ事

一坐拜ノ法 又云奉拜

正笏シテ笏頭ヲ目通りマテ上ケ(即チ笏ト眼ト相離ル、コト七寸許)其ノマ、平伏スルナリ此ノ時ハ笏ト鼻ト距ルコト凡ソ三寸又笏ト地ト距ルコト三寸許

揖事 笏者儀ツテ面ニ下、笏頭并手、本同シ之ヲ引、之ヲ(中寄)屈、時過、起揚、之、時聊、早キ也、(作法故實)

乎加無といふは乎禮加々無なり(中寄)掌を合すこと、心得たるを佛法の拜より云るひがことなり(中寄)さて吾徒長瀬真幸が云上代の

拜禮の儀は今世俗人の禮を爲ると云爲の如く俯て頭を下げて兩手を衝て拜みしなるべし云々(古事記傳中)

兩段再拜とはかの再拜を兩度するよしなり(古事記傳中)

ニシテ三息間拜シ後頭ヲ上ケテ次第ニ把笏ノ躰ニ復スルナリ

一起拜ノ法

右足ヲ前ニ出シテ膝ヲ起テ次ニ左足ヲ出スト共ニ身ヲ起シテ笏頭目通、マテ上ケ左足ノ膝ヲ地ニ付ケ次ニ右足ヲ退ケ爪立テタル足ヲ後ニ伸、スト同時ニ笏ト共ニ平伏スルナリ平伏ノ度坐拜ニ同シ

凡ヘテ神社ハ其ノ構造及拜殿ノ位置等區々ニシテ一概ニ律スヘカラス(或ハ拜殿ノミノ神社モアリ)ト雖モ通例坐拜ハ本殿ノ禮ニシテ起拜ハ拜殿ニ於ケル禮ナリト心得ヘシ

一立拜ノ法

立拜ハ立チカラ正笏シテ笏頭目通、マテ上ケ笏ト共ニ脊ヲ水平ニ折ル足ヲ曲ムルハ非ナリ

一再拜ノ法

拜チフタ、ビスルノ謂ナリ故ニ居坐ノ拜ト起拜ノ別アリ 前坐拜チ二度スルハ居坐ノ再拜、又云女房ニメ起拜二度スルハ起居ノ再拜ナリ 四度拜、又云兩段再拜及八

本朝之風四度拜神謂之兩段再拜一女房神拜兩段再拜乍居四度禮之也桃華藥葉四度拜八度拜なご云は腕端ながら頭を上げみ下けみする數を以ていふなり(記傳)神主就祝詞座三(中略)神主再拜皇太子以下亦再拜主起拜自餘(儀式居拜下同一)

度拜兩段再拜二度ナドモ此ノ二種アリキ(然レト現今普通ニ所謂再拜又謂フ兩段再拜ハ起拜ノ方ヲノミ云ヘリ)又起拜ハ通例齋主ノ爲ス所ニシテ居拜ハ餘ノ祭官ノ爲ス所タリ然レモ彼ノ起拜ヲ本居翁ハ其ノ著古事記傳卷ノ二「笏を以て起居すは後の漢風の拜にて中々に非ぶとなり」ト論ハレタルヲ見レハ本邦古風ノ拜ナラシカト思ヘド中古以來ハ朝廷ニテモ行ハレ今猶祝詞奏上及奉幣式等ニ行ハルハ拜ナルヲ以テ暫ク之ヲ存シ置クナリ又再拜テフ名目モ本邦固有ノ名ニ非ラス中古以來佛ノ三身法報ヲ三度拜スルニ准テ神ヲ本地垂跡ナト無稽ノ説ヲ構ヘ遂ニ此ノ名ヲ付シケルナリ正クハ二度拜四度拜又八度拜ナト言フヘキナリ

拍手法

古來物ヲ受渡スル時或ハ誓契シタル時等手ヲ拍チテ其ノ信ヲ表ハセリ蓋シ拍手ノ起源ナルニヤ元來其ノ數定リタルニ非ササレト通例一拜四拍手又云二拜八拍手所謂八開手(又云)長拍手)二段是也四拜十六拍手八開手八拜三十二拍手長拍手等ノ拍方アリ然レモ現今次第ニ減拍シテ通常一拜一拍手二拜四拍手四拜八拍手等其ノ半ヲ拍

ツトナレリ又合拍手退手連拍手等事ニ應シテ拍方アリ幣使カ介者ニ奉幣セシメタル時介者其ノ奉幣濟ミタル旨ヲ通セン爲先一拍手シ次ニ幣使ト交互都合四拍手スルハ合拍手ナリ齋主拍手シ祭官之ニ應シテ拍手スルハ連拍手ナリ退出ノ時二拍シテ一揖シ退クハ退手ナリ拍手ハ左ノ手ヲ少ク外ニ出シ右手ヲ少ク内ニシテ拍ツ是傳來ノ作法ナリ

膝行及膝退

膝行ハ殿上内陣ナト神前最近ニ進ミタル時或ハ齋主ニ玉串ヲ渡ス時又ハ直會ノ酌等凡テ尊上ニ對シテ必要ナル所作ニシテ先三尺許前ヨリ兩足ヲ突キ爪立テテ左膝ヲ進メ次ニ右膝ヲ左膝ノ半歩先ニ進メ次ニ左膝ヲ右膝ノ半歩先ニ進メ次ニ右膝ヲ左膝ニ相列シテ膝ヲ三十度許ノ角ニ復スルナリ

膝行ハ必ス三度ニ限ルモノトス膝退ハ前膝行法ヲ反覆スルナリ唯膝行ト異ナル處ハ彼ハ最初ニ左膝ヲ進メタルヲ膝退ハ右膝ヲ先ニ退クルノミ

伏行又云屈行

膝行三度事安元二年三月二十五日酉刻若東帶膝行三度先左次右最末未引寄右膝一齊ニ左膝一也(貞丈雜記引玉葉)

伏行ハ神前或ハ最貴人ノ前ヲ横斷スル時ノ禮ニシテ立拜ノ如ク腰ヲ水平ニ折りテ徐歩スルナリ

啓折又敬折トカク

伏行ト同シ所作ナリ唯異ナル所ハ貴人カ吾前ヲ通行セラル、時立拜スル居止ノ禮ナルノミ

奉幣作法

先奉幣者進ミテ奉幣ノ座ニ着ク

次ニ從員進ミテ幣ヲ奉幣者ニ渡ス膝行膝退及幣ノ持方同渡シ方等心得ノ部ニ云フヘシ 渡シ畢リテ膝退及回轉シテ復座ス

其ノ儀幣ヲ左上トシ上ヲ左手下ヲ右手ニテ持テ身ヲ直立シテ足ヲ揃ヘ幣ヲ正中ニ取直シ立揖シテ左足ヲ少シ後方ニ引クト同時ニ幣ヲ左ニ振りツ、身モ少シ斜ニナリ次ニ左足ヲ本ニ復シ次ニ右足次ニ左足ト踏交ハシ幣ヲゆら、かして左手ヲ攪リ下ケ幣ヲ眞直ニ立テ、平伏ス此ノ時幣ノ表面ヲ神殿ノ方ニ向ケ次ニ前行事ヲ反覆シテ坐シニ拜シテ介者ニ幣ヲ渡スナリ此ノ時豫テ便宜

ノ所ニ侍候(蹲踞)シ居タル介者幣ヲ受ケ捧ケ奉リ退下シテ幣使ニ向ヒテ返祝カヒツク(即、合拍手ナリ)ス或ハ齋主一人シテ獻スルモアリ以上ハ唯其ノ一例ナルノミ

返祝ハ介者カ幣使ニ對シ行事済ミタル旨ヲ傳フル爲、ノ合圖ナリ故ニ奉幣シツ、アルコト見エタル場合ニハ其ノ必要ナシ

祝詞奏上法

先、笏ニ祝詞ヲ持添或ハ懷中ニ又祝詞袋ニ容レテ懸クルアリヘテ把笏ノマ、神前ニ進ミ香ノ揖次ニ坐揖

次ニ起拜二度所謂再拜

次ニ坐拜二度

次ニ坐拜ノ笏ヲ膝ノ上臍ノ前ニ持寄ス

次ニ左手食指ヲ笏ト祝詞トノ間ニ挟ミテシテ笏頭ヲ持テツ、其ノ手ヲ笏ノ三分一ノ所マテ攪、下

ケテ持ツ

次ニ右ノ手ニテ祝詞ヲ持テ懷中笏ニ添ヘタル時ノ所作ス

座拜畢レハ直ニ安座シテ祝詞ヲ奏スル例モアリ蓋シ本邦ノ古風ナルナリ

次ニ右ノ手ニテ笏ノ外ヲ持テ右膝ノ傍ニ置クナリ
 次ニ拍手
 次ニ右手ニテ懷中ノ祝詞ヲ取り持テ膝ノ左側ニテ開ク
 次ニ膝ノ上ニ兩腕ヲ懸ケテ祝詞ヲ二折右手ヲ上ニシテ左手ヲ下ニシテ前ニ折ルシテ一揖ス
 次ニ祝詞ヲ目通マテ上ケテ奏スヘシ
 次ニ又二折此ノ時ハ左手ヲ上ニシテ右手ヲ下ニスシテ一揖ス
 次ニ祝詞ヲ左ノ方ニテ卷キ而シテ懷中ス
 次ニ笏ヲ執ル
 次ニ坐拜二度
 次ニ起拜二度
 次ニ拍手
 次ニ坐揖
 次ニ退出

心得ノ部

祓主心得

先ッ一揖シテ坐ヲ起テ立揖シテ祓座ノ前ニ進ミテ一揖シ膝行シテ祓ノ座ニ着キ
 一揖一拜シテ笏ヲ置キ二拍手シテ祝詞ヲ懷中ヨリ取出シ或ハ笏ニ持添フルモアリ左傍ニテ開
 キ次イテ正面ニ復シ二折シテ一揖シ奏シ畢リテ一揖シ祝詞ヲ卷キ懷中シテ一揖
 一拜笏ヲ置キ二拍手シテ笏ヲ執リ一揖シテ本坐ニ復シ又坐揖ス

大麻行事心得

揖シテ大麻案ノ前ニ進ミ座揖シテ笏ヲ收メ膝行シテ左手ヲ伸ヘテ麻串ヲ取り右
 手ニテ根本ヲ持テ膝退シテ起テ其ノマ、回轉シテ神饌所ニ入り神饌ヲ左右左ト
 祓ヘ次ニ祭場ニ復リ齋主以下參向ノ諸員等所在庶民ニ至ルマテ順次之レヲ祓フ
 ナリ正畧時宜ニ隨フテ不可ナシ

上棟祭ノ祓ト普通祓ト異ナル心得

普通ニハ先ッ西ヲ祓ヘ次ニ東次ニ北次ニ南次ニ中央ト順次祓フ 然ルニ上棟
 祭ノ祓ニアリテハ第一西南隅第二西北隅第三東北隅第四東南隅第五ニ中央ト

其隅ヲ蔽フナリ

蔽除ヲ受クル者ノ心得

蔽主我前ニ向ヒ來ルヲ見レハ揖シテ蔽ヲ受ケ行事畢レハ又把笏スルナリ

盥湯行事心得

揖シテ起テ案前ニ至リ立揖膝行着座シテ右手ニ盥湯器ヲ執リ左手ヲ持添ヘ膝退立揖回轉シテ神饌所ニ入り柳ノ小枝或ハ笹ニテ盥湯ヲ浸シツ、蔽フナリ其ノ順序前ニ同シ

散米行事心得

盥湯行事ノ如シ

開閉扉式心得

齋主揖シテ起テ先祝詞ノ座ニ着キ揖及ニ拜拍手此ノ時神祭ニ付キ開扉スル旨ヲ奏スルモヨカラシシテ斜ニナリツ、階ヲ昇リ揖及膝行シテ御扉ノ左右ノ方ニ着キ小揖シ御錠ヲ抜キテ便宜ノ處ニ置キ次ニ開扉ス此ノ時警蹕一同平伏終リテ膝退降階シテ階下ニ侍候ス閉扉式ハ此ノ作法ヲ反覆スルナリ

殿階ヲ昇降スル心得

昇階ニハ正シク神前ニ向ハス稍斜ニナリテ殿ノ左側我ヲ階毎ニ足ヲ聚メテ昇リ殿ノ左ニ着シ降階ニハ神前ヲ背ニセス殿ノ右側ヲ斜ニナリツ、降ルヘシ但シ階ヲ横斷スヘカラス又二人並ヒテ昇階スレハ互ニ左右ニ別レテ左方ノ者ハ左側ニ沿ヒテ左足ヲ先ニシ右方ノ者ハ右側ニ沿ヒテ右足ヲ先ニスヘシ降階ノ時之ニ准ス

警蹕ノ心得

警蹕ハ開閉扉昇降神或ハ渡御等ノ時ニ衆人ヲ警戒スルノ唱ヘナリ通例ナリト呼フ而シテ聲ニ高低ノ別アリ始高ク次第ニ低クスルノ唱方ハ開扉及降神等ノ時唱フル聲ニシテ始低ク次第ニ高ク發聲スルハ昇神或ハ閉扉等ニ唱フル聲ト知ルヘシ又ケ―ヒート唱フルハ鎮魂祭ナリト唱フルハ新嘗祭ニ唱ヘラル、警蹕ナリ

開閉扉ノ時敬禮ノ心得

齋主起テ階ヲ昇ラントスル時一同正笏シテ兩手ノ肱ヲ兩膝ノ上邊ニ居エ齋

主御扉ニ手ヲカケ典禮警報セハ一同頭ヲ下ケテ敬拜シ了ルマテ頭ヲ上クヘカ
ラス典禮了ルト告クレハ頭ヲ上ケテ把笏スルナリ

献供式順序

神饌長坐揖シテ起テ立揖シテ神前左ノ方ニ蹲踞シ居ルヘシ

次ニ神饌次長同ク階ノ中間ニ踞キ居ル

次ニ傳供者モ左右斜ニ相對シテ踞ク

次ニ神饌長ノ笏ヲ收ムルヲ見テ傳供者何レモ笏ヲ收メテ待ツ後取神饌所ヨリ神

饌ヲ繰出シ順次傳供ス

、神饌ノ並列順序

神饌幣物ハ各神社ノ古例アリテ一概ニ法ルヘカラスト雖モマツ通例ノ順序ヲ
考フルニ

一洗 米

二御 酒

三餅

四海 魚

五川 魚

六鳥

七海 菜

八野 菜

九菓 物

十 盥
水

ノ如シ又魚ハ川背海腹トテ献シ方ノ式例モアリ其ノ並ヘ方ハ第一ヲ中央ニ居
エ第二ヲ左第三ヲ右ト順次並列スルヲ正シトス尙幣物及各地ノ所産或ハ外邦
ノ物品ヲ副ヘテ奉ル時ハ此ノ次ニ献スヘシ

注意 神饌ヲ傳供スルニ御蓋絹又ハ覆衣サヘナキ場合ニハ豫メ覆面ノ用意
アルヘシ

蹲踞及跪坐

蹲踞ハ足ヲ聚メテうづくまり居ルナイヒ跪坐トハ足ヲ地ニ付ケテ爪立テ居ル
ナイフ而シテ跪ニハ左或ハ座上ノ足ヲ先ニ起ニハ右或ハ坐下ノ足ヲ先ニ
スヘシ此ハ何レモ殿及廊内等ニテ傳供長或ハ傳供員等カ神饌ノ授受ヲ俟ツ間
ナトノ儀ト心得ヘシ

玉串及幣鍵等ノ持方

右ノ掌ヲ上向ケテ中間ヲ持テ左ノ掌ヲ下向ケテ本ニ添ヘ持ツ（此ノ時串及鍵等
ハ右頭ニ斜ナリ）大麻薦絨等ノ持方亦同シ

同渡方

右ノ如ク斜ニ持テ齋主ノ左側ニ膝行シ申及幣鍵等ノ末ヲ左本ヲ右ニ持替ヘ此
時左頭ニ斜ナリ本ヲ齋主ノ側面ニ指出ス渡終ハルト同時ニ笏ヲ執リ敬禮膝退シテ下ル
ナリ

注意 持替ヘテ忘ルヘカラス又物ヲ渡スニ必ズ左側ヨリスヘキコトヲ忘ルヘ
カラス

玉串ノ献リ方

玉串ヲ献スルニ案上ニ建ツル時ハ表ヲ神ノ方ニ向クヘシ我方ニ向ケルハ伊勢
神宮獨特ノ法ナリ置ク時
ハ根本ヲ神ノ方トセヨ我方トナスハ伊勢神宮ニ限ル齋主ヲシテ代表者タラシムルモ餘ノ祭官一
同坐拜セヨ又必ズ拍手ヲ要ス

備考 伊勢神宮ハ八拜八拍手ス其ノ八拍手ハ二度ニ分ナテ四拍手ツトシ其
ノ拍手方短手トテ○○○○○○○○上圖ノ如ク拍ツナリ

薦藪及圓坐ノ鋪設心得

献テ三ニ折り横ニ斜ニシテ持出テ坐シテ豎ニ直シ左右ニ開キ敷ク卷ク時モ坐

揖シテ初ノ如ク三ニ折り右ニ斜ニシテ持退クナリ但圓坐ハ結極目ヲ前ニナル
様敷キ設クヘシ

高坏三方ノ持方

高坏ハ左ノ手ニテ柄ヲ握リ右ノ手ニテ椀ヲ持テ三方ナレハ拇指ヲふちノ上ニ懸
ケ食指小指マテテ三方ノふちノ下ニ入レテ堅ク持ツヘシ土器ヲ手ニテ奉ル時ハ
左手ヲ土器ノ下ニ入レ右ノ手ヲ持添フヘシ

案ノ持運ヒ方

案ノ下ヘ左ノ手ヲ入レテ受ケ右ノ手ニテ椀ヲ持ツナリ若大ナル案ナ二人シテ
持ツ時ハ左ノ方ノ者ハ左手ニテ左ノ椀ヲ持テ右手ヲ案ノ下ヘ入レテ受クヘシ

切麻ノ散シ方

切麻ハ麻及紙ヲ寸斷シ紙ニ包ミ三方ニ盛り各自拜戴シテ左右左トフリ散ラシテ
清祓ヲ行フ之レ正式ナリ又紙垂ヲ櫛ノ小枝ニ附ケテ祓行フ事アリ此ヲ祓申ト呼
フ即大麻祓ノ略式ナリ散米ノ散シ方モ亦同様ト心得ヘシ

神籬ノ辨

神籬ハ何レノ神ニ坐セ新ニ招キ奉ル時ハ之ヲ設クルナリ其ハ先ヅ注連繩ヲ周圍ニ廻ラシ地ヲ清メテ更ニ由布ヲ着ケタル櫛ヲ建テ、神座トス是レヲ神籬トハ云フナリ

飾裝用櫛ニ劔鏡曲玉ヲ懸クル心得

眞櫛ヲ神前ノ左右ニ挿シ建テ曲玉ト鏡トヲ神前ノ左ニ懸ケ劔ハ神前ノ右ニ懸クヘシ尙五色ノ絹等ヲ垂レ下クルハ例ノ事ナリ

押折ノ心得

雨中ノ神事ナトニ狩衣ノ裾ヲ表ニ折り反シテ當帶ニ挟ムコトアリ之ヲ押折トイフ必ズ左ニ折り挟ムヘシ右ニ挟ムハ凶儀ナリ而シテ押折ハ唯雨中詮ナキワサナレハ途中ノミニテ神殿ニ入ラムトスル時ハ垂直シテ容姿ヲ正スコトヲ忘ルヘカラス

着沓及脱沓

沓ハ先ヅ進行ニハ左足或ハ坐上ノ足ヨリ着ケ退下ニハ右足ヨリ着クルヲ禮トス脱沓ハ左足ヨリシ次ニ右足ノ沓ヲ脱クナリ

明治三十四年二月九日印刷
全 年二月十五日發行

(非賣品)

著者 中垣 孝雄

奈良縣奈良市登大路

發行者 水谷川 忠起

奈良縣奈良市橋本一番地

印刷者 阪田 一郎

奈良縣奈良市橋本三十六番地

印刷所 奈良明新社

發行所 奈良縣々社以下神職取締所

| |
|-----|
| 184 |
| 164 |

